序にかえて

——「神の民」の意味——

土肥昭夫

聖書はキリスト者の群れを「神の民」とよんでいる。神がつくり，えらび，契約を結びたもうたもの——それが神の民イスラエルである。旧約聖書において歴史の中にある少数の民イスラエルは神とこのようなかかわりにあるが故に神の民といわれた。彼等はエジプトよりの脱出という歴史的出来事をとおし，またモーセへの律法の附与という歴史的行為をとおして神の民として生かされ，また生きなければならぬことを示された。神の民であることはその意味で神のめぐみの業であって，人間の自由な選択とか，あるいは民族的概念ではない。この事は新約聖書において実現された。新約聖書が神の民というとき，それはキリスト・イエスの十字架の血によって結ばれた新しい契約にもとづいてつくられた新しい神の民を意味する。それは最早律法によらないで福音によってささえられ，さまざまな供犠によらないで，ひとたびささげられたキリストの犠牲によって生かされたまことのイスラエルである。このキリストに生きる共同体としての神の民——教会は最早ユダヤ人のみならず異邦人をふくめて全世界のためにあるキリストの福音に生きる群れ，「第三の民」である。その限りにおいて神の民は独自性とともに普遍性をもち，歴中の中にかく根をおろしつつ，福音の証し，交わり，また奉仕に生きるキリスト者の共同体である。

キリストの到来と再臨の間に生きる教会が聖書によって神の民とされるとき，それは次のようなことを意味する。

(1) 神の民が神のキリストにおける歴史的創造と経倫のあらわれであるならば，これを除いて神が世界とかかわりたもう業はあらわれない。キリストにある神の和解の行為はこの共同体をとおしてあらわれ，この共同体はそのあたらしい創造と救済の器である。教会はキリストの体なのである。教会はこのかけ

がえもない生命と使命を自らの身に負っているのである。教会がこのような自らの固有の意味とその務めを見失って，それ以外のものによりたのみ，それ以外の業をこころみようとするときには，最早「地の塩」「世の光」たり得ない。教会はそのあらゆるいとなみをとおして自らをささえ，生かす隅の首石たるキリストの業に参与し，これを今日の歴史の中でどのように行使してゆくかを真剣に考え，謙虚に反省し，自らに先立ちたもうキリストの務めにあずかるものでなければならぬ。

(2)　神の民はすぐれて歴史的概念である。神のイスラエルとかキリストの教会は歴史の外にあるのではなく，歴中の中にあり，歴史を生きるものである。その意味で教会はこの世からのものではないが，この世にあるものであり，この世をとおしてその務めを行使する。教会は神と世界の仲保的媒介的存在として，この世のさまざまなイデオロギーや権威に対して信仰に生きる主体的自由をもってこれらとかかわり，これらを評価し，また対決折衝する。また同時に教会は自らを世界と分離せしめることなく，その中にふかく根をおろし，それを内より変革し，新しい人間，文化，あるいは社会を創造する生命となり，源泉となる。すべてのキリスト者はまさにその荷い手とて召されている。今日の世界の生存の意味をその深みにおいて洞察し，まことの人間と社会のあり方を目ざして主体的に参与してゆくことがキリスト者の課題である。キリストが自己のためではなく，世界のために生き死にたもうたように，キリストに生きる共同体は自己のためではなく世界のために生き，働き，そして死ぬものでなければならぬ。

(3)　神の民は教会をささえる根源であるとともに教会をさばく終末的概念である。教会は神の民とされることにより，若しそれにふさわしくないものとなるときには，かのイスラエルの人々に預言者をとおしてかたりたもうた神の審判と警告が自己にふりむけられていることを知らねばならぬ。神の民はキリストにあって全世界に住む信仰者たちをひとつにする絆であるにも拘らず，教会がその信仰の故に分たれているならば，その不一致を神への反逆として神の前にざんげし，自らをあたらしくして，福音にふさわしいものたるべく，一致の根源と方法を探索するものでなければならぬ。また神の民がこの世に生きるす

べてのキリスト者を意味するにも拘らず，教会が特定の務めにあずかるものにだけ神の民たる意味と使命を附与するならば，その基本的誤謬を聖書に即さぬものとしてきびしく反省し，すべての信徒が神の民たるべき光栄と責任を明らかにしてゆくために，自らを革新してゆかねばならぬ。世界教会運動において，教会の一致を求めて聖書的信仰にすすみ，さらに聖書における神の民とかキリストの体としての教会理解をとおして，そこから教会の宣教，信仰や職制，奉仕や社会的実践を検討し，促進しようとする方法は注目されねばならぬ。日本の教会もこの課題にとりくみ，神がキリストにおいてこの国の中でえらびわかちたもうた神の民として，正しい信仰の一致とその方式，すべての信徒がキリストの体につながる肢たるべき職制の基本的研究と構造を追及し，前進させてゆかねばならぬ。

(4)　神の民は決して個人的概念でなく，集団的概念である。キリスト者が信仰をもって福音をうけとめるとき，彼は単独者としてあるのではなく，神の民の群れの中にくみ入れられ，キリストを首とする共同体に参与するように位置づけられている。個人の主体的自由や独立を重んじ，自律的なキリスト教的共同体を形成した近代プロテスタント主義は福音主義的立場にそれなりの意味を持ち，近代社会の形成にそれなりの役割をはたして来た。そして今日の日本のように法的，制度的には近代化されているかに見えて，倫理的あるいは精神的には非近代的な基盤に立つ社会において，なおこのような見解は重要な意味と役割を持つ。しかしその場合においても，キリスト者が個人の自由や責任において如何なる共同体を理論的に実践的に形成してゆくかが問題である。これが組織の時代といわれる今日の大衆社会や技術文明の中で固有の証しとなることは，いうまでもない。日本のキリスト教化は必ずしも日本の近代化と同一ではなく，それをつらぬきこえて，現代の日本の社会に新しい生命と希望をさし示すものでなければならぬ。

キリスト者は神の民という信仰的共同体によって立つ以上，その主体的信仰を個人主義的人間形成におわらせることなく，むしろそれをつらぬきこえて，人格的共同体に参与せしめるものでなければならない。ここに教会や社会（家庭，地域社会，組織的集団，国家など）に即自的にふれる一つの神学的根拠が

ある。キリスト者は生きた人格的共同体としての教会を形成しつつ，そこより生命と方向づけを附与されて，社会の集団の正しい形成にかかわってゆく。現代の日本の社会においては意志の疎通がさまざまな形で喪失され，屈服か闘争か妥協のいずれしかえらばれない。また泰平ムードの蔭にうずもれて小市民的な極小的視野に生きて，神が限りなく愛したもうたこの歴史の現実に無関心となり，したがって無責任の生き方が健全な中産階級の人々をとらえつつある。このような社会の中にあって正しい主体的自由と共同体的連帯性のあり方を模索し，真実の交わりを生む努力をしてゆくキリスト者の声こそまさしく神の声ではなかろうか。

われわれは本号を「神の民—その聖書と歴史における意味」を問うための特集号とした。ここに掲載された多くの論文と書評はさまざまな分野でさまざまな立場よりこころろみられたものであるが，それなりに神の民の今日の教会と社会のかかわりを追及しようとするものである。もとよりわれわれはこれらをもって事足れりと決して思わない。むしろこれらによって読者が自己の存在をもう一度問いかけ，ともに探索するための問題提起を与えられたと思っていただければ幸いである。そしてわれわれのこころみに対して忌憚のない御批評をたまわるならば，さらに幸いである。